

令和3（2021）年度前期
授業評価アンケートの結果と分析及び提言
—PDCA サイクルに向けて—

教養教育院総務委員会委員長
南川慶二

目的

大学教育に関しては、教育目的・目標の明確化やその到達度、さらに教育（授業）方法の改善や成績評価の適正化が強く求められている。そのために、学生と教員の双方に対してアンケートを実施し、徳島大学の教養教育について質的・量的に充実した授業の提供をめざすことを目的としている。第3期中期計画・中期目標を達成するためにも学生と教員の双方に対してアンケートを実施し、双方向のPDCA サイクルを確立し、徳島大学の教育目標を達成することを目的とする。

実施方法と時期

令和元年度から毎回すべての授業科目群を対象として期末に実施している。本年度も同様に実施することとした。新型コロナウイルス感染防止のため、前期開始から4月14日まではBCP レベル3B、4月15日から5月11日までBCP レベル3Aとなった。また、全国的な感染拡大に伴うまん延防止等重点措置が追加されたことにより、学生が指定区域に移動した場合には14日間の自宅待機を指導するなど、感染対策が強化された。教養教育では、第1週目の授業は（可能な限り第2週目の授業も）遠隔授業として開始し、それ以後も感染防止対策を徹底するため、レベル3Aにおいては、教養教育院が認めた授業（演習、実習、実験を伴う授業）のみ対面の実施を可能とした。そのため、令和2年度後期と同様に対面授業と遠隔授業が混在した状況が続いた。その後、7月1日からBCP レベル1となり、対面授業が増加した。しかし、対面授業を実施する場合には講義室定員の50%が上限であるため、受講者の多い授業ではすべて遠隔授業で実施することとなった。

今回のアンケートは令和3年7月8日～8月6日に実施した。教員に対しては、授業実施報告書の提出（令和3年9月末まで）として実施した。昨年度と同様に、通常の項目に加えて遠隔授業で良かった点と不都合の有無を尋ねる項目を自由記述式で追加した。

結果と分析

1) 回収率

令和3年度から従来の8科目群が再編成され4科目群となった。前期の期末アンケート回収率の平均値は、教養科目群(68%)、創成科学科目群(64%)、基礎科目群(58%)、外国語科目群(69%)であった。直近の令和2年度後期より上昇しているが、昨年度前期の平均値(62～72%)と同程度であり、コロナ禍以前よりも回収率が低い状況が続いている。科目群の違いよりも個々の授業による違いが大きいことは例年と同様であった。回収率低下はオンライン授業によるアンケートの説明不足が原因の一つと考えられ、各教員に周知徹底を依頼しているが、改善は見られていない。アンケート結果のフィードバックの充実をはじめ、さらに対策が必要である。

2) 受講環境について

令和2年度前期から遠隔授業を中心にする方針が続いているため、受講環境に関する調査の一つとして、今回も遠隔授業で良かった点と不都合があった点を追加した。時期によっては対面授業も一部実施されたことから、時間割の都合で遠隔授業を学内で受講する場合も多いことから、多様な受講環境を反映した意見が見られた。

遠隔授業でよかった点についてのコメントは、感染リスクの不安がないことや通学等の時間節約ができることなどの利点に加え、自分のPC等で資料を閲覧できること、教員の声が聞き取りやすいこと、オンデマンドでは講義を繰り返し視聴できることなど、授業の理解促進に関する意見が目立つようになった。コロナ対応2年目で遠隔授業についての教員のスキルや学生の対応力が向上したようであり、遠隔授業の利点を積極的に活かして学修に役立てる体制が整いつつあることがわかる。遠隔授業を効果的に活用した具体例としては、学外の研究施設をライブで見学した授業について高評価のコメントが見られた。大人数の受講者全員が現地に移動することなくリアルタイムで同じ角度から実験設備を見学できるのは大きな利点と言える。

遠隔授業による受講環境の不都合な点としては、インターネット回線の不具合に起因するトラブルの報告が昨年度と同様に非常に多かった。パソコンの操作に慣れていない、機器の不具合に対応できないというコメントも一定数存在した。回線や機器の操作に関するトラブルは学生ばかりでなく教員にも発生することがある。教員の多くは昨年度から遠隔授業の実施経験を重ねているが、このように学生と教員の双方にそれぞれトラブルのリスクがあることを考えると、すべての授業を常に最善の状態を実施することは困難である。音声や映像が途切れると理解の妨げになるのは当然であるが、内容の理解以前の問題として、重要な通知を聞き漏らしたり、課題の解答ができなかったりして成績評価に影響することへの不安も大きいようである。また、学生同士あるいは学生と教員とのコミュニケーションに関しても、対面授業とは異なる状況に置かれて戸惑っている様子が感じられる意見もある。同じ授業を受講している学生の様子がわからないなど、孤独感を示す意見が散見される。また、オンデマンド形式の場合は自分のペースで学べる反面、意欲がわかない、質問しにくいという欠点も指摘されている。manabaやメール等で質問を受けつけて回答するなど、フィードバックによりコミュニケーションの機会を増やすなどの工夫が求められている。コミュニケーションについては、昨年度後期の時点ですでに多くの改善例がみられていた。オンラインでのグループワークやアクティブラーニング、質問しやすい環境など、教員によるコミュニケーションの工夫が行われている。対面授業よりも遠隔授業の方が良いという意見が増加しており、今後の授業設計において考慮する必要がある。BCPレベルによっては対面授業と遠隔授業が混在する時間割も多くなり、今後も学内で遠隔授業を受講する場合も想定しておく必要がある。学内のWi-Fi環境は順次改善が進められているが、接続不良は今期も少なからず存在しているため、さらに設備の充実を進めるとともに、時間割編成についても検討が必要である。

3) 教員の授業に対する取り組みについて

自由記述のコメントに基づいて特徴的な授業方法等を例示する。良かったという意見が多かった遠隔授業の例として、オンデマンド形式を基本として数回に一度ライブ形式で振り返りと質疑応答を行った授業がある。オンデマンド授業を通して自分のペースで学んだ後、ライブ授業で解説を聞き質問に答えてもらえることで学生の満足度が高く、両方式の利点を活用した例といえる。一方、対面授業を中心とした授業の一つで、「資料提示という面白みのない授業とは違い、板書してくれたところ」

が良かったというコメントが見られた。この授業では他の学生からも板書がわかりやすいというコメントが多く見られたことに加え、小テストの添削などのフィードバックを丁寧に実施していることもわかった。これらの結果として、「できればすべて対面がよかったと対面を経験して思った」とのコメントがあった。これらの例から、効果的な遠隔授業が増加している一方で対面授業を望む声もあり、それぞれの利点を活用できれば授業の改善につながることを期待される。実際に、対面授業と遠隔授業を組み合わせたハイブリッド形式も一部の授業で実施されている。この場合は「次の授業があるときは大学に来て、対面で受けて、質問を直接できた」というコメントに見られるように、時間割の問題を解決する手段として役立っている。この授業では、ブレイクアウトルームでのグループワークを頻繁に行うことや、授業中にアンケートを実施して学生同士の意見交換ができるなど、遠隔授業の利点を活用している点で学生から多くの高評価コメントがなされている。この他に遠隔授業の利点を活用した例として、少人数で交代しながらプレゼンテーションを行う授業がある。対面授業で学生がプレゼンテーションを行う場合には、学生の機器をプロジェクタに接続する際に端子の不適合や画像が表示されないなどのさまざまなトラブルが生じることがあるのに対し、画面共有だけで実施できる遠隔授業ではスムーズに実施できるとの意見があった。このように対面授業と同等以上にコミュニケーションやプレゼンテーションを活用している授業もあるが、従来型の講義をオンラインで実施している授業も多いようである。遠隔授業で一方向的な講義を90分連続すると集中力やモチベーションが続かないという意見が散見される。効率的に情報を伝達するという目的には従来型の講義形式が適しているが、特に大人数の遠隔授業では学生が集中できるように何らかの工夫を考慮することが望ましいと考えられる。

4) 学生の授業に対する意識

感染対策が求められる状況が長く続き、学生にとっては遠隔授業が通常の授業形態であるかのように受け入れられてきている。教員の多くが遠隔授業に慣れ、遠隔授業の利点を活用した授業が増加したことから、学生の意識も遠隔授業を肯定的に捉える傾向が強まっているようである。ライブ形式の遠隔授業では対面授業と同等あるいはそれ以上の評価をしている学生も多い。オンデマンド形式の授業については、時間割に縛られないことや繰り返し視聴できるという利点は認識されているが、一方向的な受け身になりがちであることから、ライブ形式にしてほしいという意見も増加傾向にある。また、ライブ形式であっても毎回出席確認の小テストなどを課す授業が多く、その内容についてのコメントからも学生の授業に対する意識を読み取ることができる。たとえば、「小テストが正解がない問題(自分の考えが求められる)だったので、より深く考えるきっかけになった」という感想から、遠隔授業の課題をきっかけとして大学での学びの意義を見出していることが窺える。一方向的になりがちな講義において学生の意欲を喚起するための参考になる意見である。

総括

昨年度から続く感染対策で本年度前期も遠隔授業が中心となった。遠隔授業に慣れた教員が工夫することで効果的な授業が増加しているようである。その一方で、対面授業の重要性も学生・教員の双方で改めて認識されている。遠隔授業では困難なことが多いコミュニケーションを充実する方策をさらに検討する必要がある。今後も引き続きアンケート等を活用して、改善のサイクルを進めていくことが重要である。

提言

アフターコロナに向けた授業実施方法の再検討が引き続き望まれる。昨年度後期のアンケート分析において以下の提言をまとめたが、本年度も大きな変化は見られず、引き続き検討が必要であるため再掲する。

1. 大人数の講義では遠隔授業の利点が多く示されており、アフターコロナでも継続することが妥当と考えられる。ただし、コミュニケーション不足等の問題点もあるため、クラス規模で一律に決めるのではなく、授業の目的や内容に応じて部分的に取り入れるなど、柔軟に考える必要がある。
2. オンラインコンテンツの充実により、反転授業を容易に実施できるようになった。アフターコロナにおいて対面授業主体に戻った場合、コンテンツを活用した多様な授業設計が望まれる。
3. 対面授業とライブ形式の遠隔授業が混在する時間割の問題点が多数指摘されているため、対策が必要である。学内で遠隔授業を受講するためのスペースや Wi-Fi の充実などの物理的環境を整えるとともに、例えば曜日によって対面または遠隔（ライブ形式）の日を設定するなど、時間割そのものを見直すことも含めて考えるべきであると思われる。
4. 遠隔授業を実施する場合には、ポータル（学生からの入口）を明確にする必要がある。各授業への入口が異なると学生が混乱する恐れがあるため、可能な限り同一のポータルを利用できるように統一することが望ましい。